

沖縄キリスト教短期大学報

那覇市首里当蔵町3-6-1

沖縄キリスト教短期大学

電話 (0988) 87-5161

発行人 学長 大城 実

編集人 事務局 企画課



送る言葉

(仕える者になる)

学長大城 実

「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである……」

(マタイ20:28)

短期大学の全課程を終了し、希望に胸をふくらませ、新しい旅立ちをしようとしている卒業生諸君、おめでとう。沖縄キリスト教短期大学の全教職員を代表し、心からお祝いの詞を申し上げる。私たちは、誇りと期待とをもつて諸君を送り出す。また、諸君のこれからの人生の歩みの上に、神様の導きと祝福とを祈っている。

さて、諸君は今、各自自分の選びとった人生の道に旅立とうとしている。希望通りになるかどうかにかかわりなく、これから諸君が歩む人生は、諸君一人ひとりの人生であって、誰のものでもない。

人は誰でも自分の人生を、自分で生きるしかない。諸君がどんな人生を生きるかは、誰の責任でもなく、自分の責任なのである。自分の人生は、自分で選びとり、切り開いていく他はない。それは、遠く、険しい道かもしれないが、自分の責任で生きなければならぬ。どうか、一回限りの人生を、主体的に生きて欲しい。

しかし、一回限りの、かけがえない人生、いのちは、はかないものである。必ず終わりがくるものである。だからこそ、その有限のいのちをどう生きるかが、大切なのだ。

人は、自分のいのちを生きねばならないが、しかしひとりで生きるのではない。人は自分の責任で生きねばならないが、そのいのちは決して自分のものではない。人は他の人と共に生きるべく定められており、そのいのちは他の人との関わりの中で与えられるものではないからである。

「人はひとりで人になるのではない」と私はくり返し語ってきた。今日またそのことを繰り返して言う。私たちは、ひとりで人にはなれないし、自分の存在意義を見出すこともできない。親や兄弟、他の人との交わりの中で、人間として成長するのであり、他の人との関わり合いの中で、自分の存在価値が見えてくるのである。愛する者だけでなく、多くの人がひとりの交わりの中で、私たちは人となる。それ故に、自分のいのちを、自分以外の人のためにどう生きるかが問われるのである。

私たち人間という生き物は、欲の深い存在である。あらゆるものを自分のものにしたい。自分の支配下におきたい。そういう願望がある。私たちは、周りにあるものを、人であれ物であれ、自分のために利用することに慣れている。得になることであれば好意を示し、利に反すると思うと、邪険にする。損得勘定が、私たちの判断の基準になっていることが、如何に多いことか。

それに対して、聖書はイエスの別の生き方を示している。イエスは、三十数年の生涯を、当時のユダヤ社会において疎外され、虐げられた人びとと共に生き、その為に自らの命を燃しつくされた方であった。聖書の主張は、私たちもイエスの生き方を模範として、他の人びとを自分の利益のために利用するのではなく、むしろ、他の人たちが、真に豊かないのちを生きるために仕えるべきだと言うのである。人はひとりで人になるのではない、と私が言い続けた理由はここにあったのである。私個人に即して言えば、私は他人の助けをかりて私となりえた。それ故に、私もまた他の人が人となる営みに仕える以外に、私の生きる道はない。

今日、私たちは、科学万能の時代に生きている。科学に解決できない問題はないかのような観がある。いつの間にか私たちの頭の中にも、科学的でないもの、客観的に検証できないものは、「価値なし」として否定する考えが入り込んできている。その結果、このころの問題は忘れ去られ、物質的に豊かになるにつれて、人のこころは貧しく、さんできたのではないだろうか。あらゆる方面で、非人間化が進んでいるのではないだろうか。イエスの逆説は、私たちがこころを取り戻す道を示している。その約束に、自らの可能性をかけて欲しい。仕える生き方の中に自己実現の道を見出したい。さし上げる。The best of all is, God is with us. 最も小さい者に心をかけ給う神が、諸君と共に歩まれる。

御健闘を祈る。

体育館を配する。教室棟は、小人数制教育、学習環境、柔軟なカリキュラムへの対応性を考慮した建物である。体育館は、スポーツ活動は勿論のこと、その他に、諸文化活動、人間の交流の場としての機能をも有する。

四、学生会館

学生会館は体育館の横に位置し「ゆとりのセンター」の中心となる。同窓会室、食堂、売店、娯楽室、クラブ・サークル室、宿泊研修室等が含まれ人間交流の中心でありソーシャルゾーンの中心である。

五、管理棟

入口に最も近い所に管理棟がある。大学で生活する学生や教職員だけでなく、大学を訪れる全ての人に情報を提供する。また、大学の使命である教育・研究・社会奉仕を効果的にすすめる上で中核的な役割を果たす場である。

六、特別教室と研究室

特別教室は、これまで述べた基本的な建物の中に有機的に配置される。L・I、視聴覚教室、ピアノ教室、絵画・工作室、栄養・保健実習室、カウンセリグルーム等である。教育職員の研究室は、図書館と教室棟のあるアカデミックゾーンの静寂な所に設置される。

七、憩いの広場

チャペル・図書館、教室棟、体育館、学生会館、管理棟に囲まれた空間が「憩いの広場」である。緑と花に囲まれた中庭は、落ち着きの中にもダイナミックな空間構成を演出する。語らいの場でもあり、若く美しい学生達の打つ白いボールが空に舞う場でもある。寒い冬の季節を除いては色々な野外イベントが楽しめるダイナミックな空間である。

育館、学生会館、管理棟に囲まれた空間が「憩いの広場」である。緑と花に囲まれた中庭は、落ち着きの中にもダイナミックな空間構成を演出する。語らいの場でもあり、若く美しい学生達の打つ白いボールが空に舞う場でもある。寒い冬の季節を除いては色々な野外イベントが楽しめるダイナミックな空間である。

「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである……」

短期大学の全課程を終了し、希望に胸をふくらませ、新しい旅立ちをしようとしている卒業生諸君、おめでとう。沖縄キリスト教短期大学の全教職員を代表し、心からお祝いの詞を申し上げる。私たちは、誇りと期待とをもつて諸君を送り出す。また、諸君のこれからの人生の歩みの上に、神様の導きと祝福とを祈っている。

さて、諸君は今、各自自分の選びとった人生の道に旅立とうとしている。希望通りになるかどうかにかかわりなく、これから諸君が歩む人生は、諸君一人ひとりの人生であって、誰のものでもない。

ワープロ 講座開設へ

学生の多様なニーズにこたえるため、英語科では、開設科目の多様化、履修方法の柔軟化を検討してきたが、新学年度よりカリキュラムを大幅に改訂することになった。

そのカリキュラム多様化の一環として、四月から英語科専門科目として、ワード・プロセッサの講座を新設する。前期に「ワード・プロセッサ I」、後期に「ワ



ード・プロセッサ II」を開講する。前期に基礎編を、後期に応用編を学ぶことになる。

英語科―新カリキュラムで 将来の計画としては、キリスト教研究所、外国語研究所、付属幼稚園、付属保育園、一般教育科の新設、運動場の設置等が挙げられる。大学の規模は現状と殆ど変わらないことはなく、小規模ながら内容の充実した大学を目指す。

1985年度 就職状況 1986・2・24現在

(英 語 科)	内定者数	日本電気フィールドサービス(株)	1
日本銀行 那覇支店	1	韓国 建	2
農林中央金庫	3	沖縄ツーリスト(株)	3
安田火災海上保険(株)	1	大阪村機械製作所	1
沖縄銀行	6	沖縄観光開発(株)	1
国際電信電話(株)	1	糸数税務会計事務所	1
琉球銀行	6	国家公務員(初)	1
沖縄富士通システムエンジニアリング	2	沖縄通運(株)	1
大信販	4	(保 育 科)	内定者数
琉球リース	1	NEC日本電気エンジニアリング(株)	1
全日空商事(株)	1	沖縄富士通システムエンジニアリング	1
琉球セメント(株)	1	沖縄銀行	3
大同火災海上保険(株)	1	沖縄相互銀行	1
南西航空(株)	5	沖縄リコー(株)	1
沖縄信販(株)	1	沖縄キリスト教センター	1
沖縄リコー(株)	1	真栄原カトリック幼稚園	1
沖縄テレビ放送	1	シオン幼稚園	1
琉球石油(株)	2	社会福祉法人 名護学院	1
電洋電機通信工業(株)	1	社会福祉法人 愛泉保育園	1
琉球総合開発(株)	1	コザ聖母幼稚園	3
総合コンピューター	1	わかば保育園	1
琉球ウボウ	2	電 算	1
		電 プリンター	1

就職戦線厳しい今日この頃だが本短大では、県内大学の中でも一流企業への就職率が一番高い。今年の就職内定状況は次の通りである。

優良企業への就職!!

さわやかに肌を感じる頃になりました。

今年度は一巻も「学報」を発行しておらず、時期的に大変あわただしい中に「学報」を発行することになりました。発行まで二週間足らずという時間的余裕に余裕のない編集になりましたが、何とか発行することができ、ホットしているところです。次号は、「移転特集」を掲載する予定です。

(企)

大学像—キャンパスプラン—

キャンパス移転企画会議

I. キャンパス移転基本計画

- (1)取得用地面積 26,337㎡(8,000坪)
1983年10月～1986年2月
- (2)用地造成 1986年度～1987年度
- (3)校舎建設 1987年度～1988年度

II. 第一次事業計画(概要)

- (1)施設の内容
チャペル・管理棟・各種教室・研究室・
図書館・学生ユニオン・体育館等

皆様の暖いご支援により推進して参りました本短期大学キャンパス移転計画(第一次事業計画)ができました。キャンパス移転基本構想にもとづき、未来の大学像を描いてみました。ご報告いたします。移転の進捗状況につきましては、概に別の紙面でご報告申し上げます。また、取得できましたので、開発行為許可申請業務を開始致しました。今後共、益々のご理解とご協力をお願い致します。

新キャンパス

—その哲学と具体像—

大学像

I 建学の精神

「沖縄を国際的平和の島に」
「キリストにあって平和をつくり出す人材の育成」

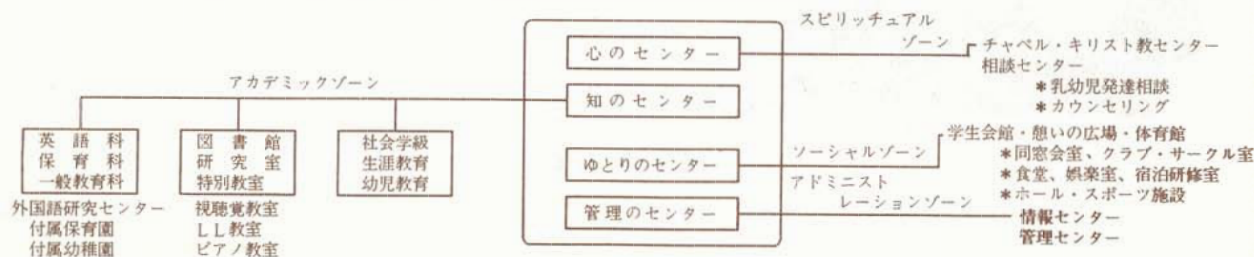
礼拝
キリスト教教育
小人数制教育
人間の交流
カリキュラムの柔軟性

II 大学の使命

社会奉仕……「開かれた大学」：「誰でも」(経済的階層や社会的地位、性別、職業のいかんを問わず)、「いつでも」(人生のあらゆる時期に)「どこでも」(大学、家庭、社会のどこでも)学べる大学
「地域の文化センター」としての大学

研究 教育

IV キャンパスの構造



V キャンパスの具体像：自然との調和・真・善・美のあるキャンパス

丘の上の緑の中にチャペルの見える大学
キリスト教的雰囲気のあるキャンパス
落ち着いた・静けさ・やさしさのあるキャンパス
心のなごむキャンパス

明るいキャンパス
花のある美しいキャンパス
笑顔に満ちたキャンパス
建物の美しいキャンパス

交流のあるキャンパス
語らいのあるキャンパス
老若男女の行き交うキャンパス
国際色のあるキャンパス

知的雰囲気のあるキャンパス
学習熱心な人達がいるキャンパス
研究熱心な人達がいるキャンパス
教育熱心な人達がいるキャンパス

三、教室棟と体育館
チャペルと図書館の両脇には、教育活動の中心となる教室棟と生活の「動」なる部分の中心となる

二、チャペルと図書館
キャンパスの中心は「心のセンター」であるチャペルと「知のセンター」の中心である図書館である。チャペルと図書館を一つの建築物にし、全体が落ち着いたチャペルに見えるように設計される。敬虔さ、落ち着き、静けさ、やさしさのある建物である。「祈りつつ学び、学びつつ祈る」場であり「主をおそれることばは知識のはじまりである」という聖書のことばに相応しい建物といえよう。スピリチュアルゾーンであると同時にアカデミックゾーンでもある。

一、建学の精神に基づく構造
丘の上の緑の中にチャペルの見える大学、これが外から見たキャンパスである。全体が小高い丘の上であり、緑に囲まれた静かな大学である。高層建築物を避け、自然との調和をはかり人間の集団が人間らしく暮らせる環境である。「大学は勉強するところだけではない。食べ、飲み、眠り、考える人間生活の一つの中心である」とする設計者コルビシユの設計哲学を具現化したものである。コルビシユのいう人間生活に「祈り」を加え、しかも、それを最も重視したのがキャンパスの全体像である。

卒業生に対するメッセージ

学生部長
漢那憲治



去る二月二十六日から二八日まで九州大で学電算センターでデータのセットと計算をしてきた。その間に、朝日新聞(二月二十七日)の次のような記事に出あった。

ほくら、実年院生
大阪市立大の大学院
「五〇歳以上」に五人合格

これは大阪府立大学経済学部が五〇歳以上を対象に始めた大学院生募集の合格発表に関するものであった。まさに生涯学習の到来である。大学を卒業してから、会社をやめてから、いつでも学習できる時代である。また、学習しなければついていくことが出来ない時代でもある。

コンピュータを使いながら、十年前には自分がそれを使うことになることは夢にも考えなかったことが思い出される。同僚の専門家より少しづつ習って、どうにか一人で九州大学まで来て使えるようになった。これも大学を卒業してからの手習である。われわれは大学を卒業したからといってスタンダードの知識(これこれを知っている)

誇りをもってスタート

学生会々長
上間 かおる



私は沖縄キリスト教短期大学を卒業したとき、

ばいんだということ)を自認することはできなくなっているし、また文化系とか理科系とかも言えなくなってきた。今後はそのようなものを越えた新しい共通の知識、つまり新しい常識が要請されているものと考えられる。ここから卒業式というものが始まり、新たな出発、という Commencement の意味であることが痛感されよう。われわれはハイテクの情報時代に入っている。情報量の爆発的な増加とハイテクに対処するためには、これまでのあてがいがいぶちな知識ではなく一人ひとりが自分の個性的な特徴のある知識のレパートリーを持つていくことが必要になってくる。すなわち自分の間いかけによってさまざまな道から知識の実をうばいとてくるような力、知識を選び取りうばいとるような力、そのような能力が要求されている。だから卒業とは学びの終りではなく、学びの新たな出発であるのだ。

業します。そして、一社会人としても第一歩を踏み出しました。二ヶ年間という短い年月ではありましたが、社会人となるための基礎を確かなものとするために、学生として楽しい思い出をつくるのが出来た。思い起こせば、息はずませて駆け登ったキリ短坂、あと三曲、あと二曲……とがんばったピアノ室、青い海の見える心安らぐ図書館。そして、先生方と学生で活気あふれる教室すべてが私の頭の中を走馬燈のように駆けめぐります。

わたしが、印象に残っている一つに、入学して間もない頃行なわれたオリエンテーション・キャンプがあります。そこで、キリスト教短大のすばらしい伝統を学ぶことが出来、大学生活への期待が大きくなっていました。数々の学園行事の中で最も印象に残っているのは、第二十一回のキリ短祭です。

統一テーマを「感じとれ瞬間」とき)の鼓動 —Dance to the Beat of the times— と題し、私達は年間の最大行事となるキリ短祭を開催することが出来ました。若者の活力が凝縮されている現代において、クラス・サークルなどの学生全員が一致団結し、その連帯と協力によって実を結んだのが第二十一回「キリ短祭」です。私達は、青春の日々をただ流されるままに生きるのではなく、その成長の節となる鼓動(自己)をこれまでの学園行事や講義など、

卒業に寄せて

英語科一年
吉岡 実千代



今日の「卒業」の日を持って、私は沖縄キリスト教短期大学の学生から、一社会人として巣立って行きます。

二ヶ年という短かい期間が、こんなに充実し、密で、実のある生活になるとは、唯が予想できたでしょう。不安と期待を抱いて迎えた入学式から、キャンパス、スポーツデー、学園祭と思いが数限りなく彩やかに蘇って来ます。その中で、連帯の美しさを知り、友情を育み、その反面、一人の存在の大きさを学びました。それから、温かく指導し接して下さった諸先生のすべてから得たものも、私の成長の土台となっています。その中でもクラブ活動を通して学び得たものは、クラブの一員として

ての講演の成功の喜びを割ち合えた事だけでなく、その過程において、「信頼」と「責任」という言葉の重み、そのすばらしさを認識した事です。

九月に教育実習を行った経験は将来の教育者としてばかりでなく我々若者が、今の世代を担う社会の一員であり、かつ次の世代の子に伝承する役目を持つ一人一人でもあるという自覚を植えつけました。徳山校長の「この子一人を粗末にするな」という言葉を思い出す度、身が引き締まる思いです。本業の学業面においては、後悔の念に絶えません。英語力の向上を目標に入学したにもかかわらず努力不足、ルーズさ等々反省する事が山程あります。本当に不覚でした。

卒業するにあたって、多少の後悔の念を拭い去る事は出来ませんが、それ以上に、私の心は、出会った人々、目に入った諸々の物に感謝の気持ちでいっぱいです。今日この日から、私は、社会の一員として新しいスタートを切ります。二ヶ年間で学んだ事を人生の糧とし、常に前を向いて歩いて行きたいと思ひます。

諸先生方、そしてすてきな仲間達へ、心をこめて「ありがとう」

